

## クリニカルパスの創始者そして世界的伝道者でもあったカレン・ザンダー女史の死を悼んで

日本クリニカルパス学会  
理事長 副島 秀久

9月の大型台風が過ぎ去ってすぐ、カレンの訃報に接しました。病に伏していることは聞き及んでいましたが、8月30日にご逝去されたとの由、残念の極みです。

思い起こせば、2000年の当学会の駒場エミナースでの初めての総会は、予想を上回る盛況で、会場は熱気に包まれていました。ただ、この時はカレンの講演があったにもかかわらず、私の記憶にあまりないのは、世話役の病院として走り回っていたり、他の会場にいたりしたからかもしれません。

2001年に学会として海外研修を計画し、私もそれに参加しました。New YorkのNorth Shore Jewish Hospitalでカレンのアウトカム志向パスの講義を聴きそれこそ目からうろこで日本に帰ってきました。それまでパスと言えば予定表だったり患者へのインフォームドコンセントが主で、プロセス管理と言う視点は殆どなかったからです。彼女がパスを開発し使い始めた1980年代はアメリカでDRGが始まり、医療の効率化が求められていた時代でもありました。

このアウトカム志向というパスは医療管理の上で革新的なアイデアであり、バリエーションを分析することで医療の質を改善するという手法は医療看護だけでなく、工学的視野がないと思いつかないものでした。アメリカでも当時は治療の内容を明示したり、比較したりすることは殆どなく、隣の医者がどういうやり方をやっているのかはわからないという状況でした。

加えて、医師を頂点とするヒエラルキーの風土は厳しく、医師以外が治療内容に踏み込むことはタブーといった雰囲気があり、その普及には大きな困難がありました。しかし、患者が求める医療安全や、インフォームドコンセントなどがパスの普及を後押ししました。

この研修以来、カレンとパス学会は緊密な関係を築いてきました。私がカレンと最後にお会いしたのは2007年、ヨーロッパパス学会(EPA)がロンドンで開催された時で、この時カレンと私が基調講演を行いました。そのあと主だったメンバーと会食をともにしましたが、カレンが足を引きずる様にしていたので、尋ねると帰国後腰の手術をするとのことでした。この手術は結局うまくいかなかったようです。2010年、メディカルクリエイティブ社の10周年記念パーティーに出席したときには、実況の映像が送られてきましたが、彼女が臥せったままでしたので、リハビリも順調でなかったようでした。

カレンはいつもにこにこしている気のいいアメリカのおばさんという感じで、われわれも気軽に話ができる友人でした。彼女が開発し、日本に移入されたアウトカム志向パスはいま、電子クリニカルパスと言う形でデータを効率よくとれる仕組みに進化しています。日本だけでなく、世界に広まったパスはまさに医療の静かな革命と言っても過言ではありません。

長い間、教えを頂きお付き合いいただいたカレンに改めて深謝し、哀悼の意を表します。